

# Angle Resolved Light Scattering に関するまとめ

中野武雄

1996-12-12

## 概要

この文書は H. -N. Yang, G. -C. Wang and T. -M. Lu の著書 “Diffraction from rough surfaces and Dynamic Growth Fronts” の 2-3 章の議論を抜粋してまとめたものである。原文では連続表面と結晶表面とを並行して記述しているが、ここでは連続表面を中心にまとめた。

## 1 表面散乱の一般論

### 1.1 表面散乱における構造因子

空間に分布した媒体によって波が散乱されるとき、散乱ベクトル  $k$  に対応する散乱振幅  $A(k)$  は

$$A(k) = \int D(x) e^{-i\mathbf{k}\cdot\mathbf{x}} d^3x \quad (1)$$

で与えられる。 $D(x)$  は散乱密度と呼ばれる量で、 $x$  における散乱のされやすさに対応する。

マクロなスケールで見たときに  $xy$  平面に平行であるような表面を考え、そのミクロな  $z$  座標が

$$z = z(\rho) \quad (2)$$

で与えられるものとする。 $\rho$  は  $xy$  平面上の 2 次元座標である。このとき入射波の散乱が表面でしか起こらないとすると、散乱密度  $D$  は

$$D(\rho, z') = \delta(z' - z(\rho)) \quad (3)$$

と表すことができる。すると式 1 は

$$\begin{aligned} A(k) &= \int D(\rho, z') e^{-ik_{\perp}z'} e^{-i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\rho} dz' d^2\rho \\ &= \int e^{-ik_{\perp}z(\rho)} e^{-i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\rho} d^2\rho \end{aligned} \quad (4)$$

となる。 $k_{\perp}$  は  $k$  の  $z$  方向成分、 $\mathbf{k}_{\parallel}$  は  $xy$  平面に平行な成分 (二次元ベクトル) である。

散乱の構造因子  $S(k)$  は、散乱振幅の絶対値の自乗として定義されており、

$$\begin{aligned} S(k) &= A^*(k)A(k) \\ &= \int d^2\rho' e^{ik_{\perp}z(\rho')} e^{i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\rho'} \int d^2\rho e^{-ik_{\perp}z(\rho)} e^{-i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\rho} \\ &= \iint d^2\rho' d^2\rho e^{ik_{\perp}[z(\rho')-z(\rho)]} e^{i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot(\rho'-\rho)} \end{aligned} \quad (5)$$

となる。ここで  $\mathbf{r} = \boldsymbol{\rho}' - \boldsymbol{\rho}$  として積分を書き換えると、

$$S(\mathbf{k}) = \int d^2r \left( \int d^2\rho e^{ik_{\perp}[z(\mathbf{r}+\boldsymbol{\rho})-z(\boldsymbol{\rho})]} \right) e^{i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\mathbf{r}} \quad (6)$$

を得る。

式 6 の内側の積分項を積分領域の面積で割ったものを位相相関関数 (原書では Height difference function)  $C(k_{\perp}, \mathbf{r})$  と定義する。すなわち

$$\begin{aligned} \frac{1}{A} \int d^2\rho e^{ik_{\perp}[z(\mathbf{r}+\boldsymbol{\rho})-z(\boldsymbol{\rho})]} &= \langle e^{ik_{\perp}[z(\mathbf{r}+\boldsymbol{\rho})-z(\boldsymbol{\rho})]} \rangle \\ &\equiv C(k_{\perp}, \mathbf{r}) \end{aligned} \quad (7)$$

である。ここで  $A \equiv \int d^2\rho$  である。定数係数  $A$  を無視して最終的な散乱構造因子を

$$S(\mathbf{k}) = \int d^2r C(k_{\perp}, \mathbf{r}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\mathbf{r}} \quad (8)$$

と定め、以降ではこれを用いることにする。

## 1.2 Gauss 表面における位相相関関数

位相相関関数を計算するには、 $xy$  平面上の距離  $r$  だけ離れた 2 点間における高さの違い  $\Delta z = z(\mathbf{r}) - z(\mathbf{0})$  がどのような分布関数になっているかを知る必要がある。今この関数を  $g(\Delta z, \mathbf{r})$  とすると、位相相関関数は

$$C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = \langle e^{ik_{\perp}[z(\mathbf{r}+\boldsymbol{\rho})-z(\boldsymbol{\rho})]} \rangle = \int d(\Delta z) g(\Delta z, \mathbf{r}) e^{ik_{\perp}\Delta z} \quad (9)$$

と書ける。これは式 7 での積分を  $\int d^2\rho$  から  $\int d(\Delta z) g(\Delta z, \mathbf{r})$  に変換したものと考えることができる。

ちなみに変位  $\Delta z$  の自乗平均は高さ高さ相関関数 (Height-height correlation function) と呼ばれるが、これはこの  $g(\Delta, \mathbf{r})$  を用いると

$$H(\mathbf{r}) \equiv \int d(\Delta z) (\Delta z)^2 g(\Delta z, \mathbf{r}) = \langle [z(\mathbf{r}) - z(\mathbf{0})]^2 \rangle \quad (10)$$

のように定義できる。

以降の計算では、この  $g(\Delta z, \mathbf{r})$  が Gauss 分布

$$g(\Delta z, \mathbf{r}) = \frac{1}{\sigma\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{(\Delta z)^2}{2\sigma^2}} \quad (11)$$

をしているものとする (重要な仮定なので良く認識しておく)。またこのとき一般に分散  $\sigma$  は  $r$  の関数であることに注意。

このときの位相相関関数は

$$C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = \int_{-\infty}^{\infty} d(\Delta z) \frac{1}{\sigma\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{(\Delta z)^2}{2\sigma^2}} e^{ik_{\perp}\Delta z} = e^{-\frac{1}{2}(k_{\perp}\sigma)^2} \quad (12)$$

となる。

また高さ高さ相関関数は

$$H(\mathbf{r}) = \int_{-\infty}^{\infty} d(\Delta z) (\Delta z)^2 \frac{1}{\sigma\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{(\Delta z)^2}{2\sigma^2}} = \sigma^2 \quad (13)$$

となる。式 12 と式 13 をまとめると、

$$C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = e^{-\frac{1}{2}(k_{\perp})^2 H(\mathbf{r})} \quad (14)$$

という関係が与えられることになる。

## 2 自己アフィン表面における構造因子

### 2.1 自己アフィン表面

一般に『表面ラフネス』という場合には、高さの自乗平均 (Root Mean Square: RMS)  $w$  が用いられる場合が多い。これは

$$w^2 = \langle [z(\mathbf{r}) - \langle z \rangle]^2 \rangle \quad (15)$$

と定義されている。これと先に述べた高さ高さ相関関数との関係は、

$$\begin{aligned} H(\mathbf{r}) &= \langle [z(\mathbf{r}) - z(\mathbf{0})]^2 \rangle \\ &= \langle \{ [z(\mathbf{r}) - \langle z \rangle] - [z(\mathbf{0}) - \langle z \rangle] \}^2 \rangle \\ &= \langle [z(\mathbf{r}) - \langle z \rangle]^2 \rangle + \langle [z(\mathbf{0}) - \langle z \rangle]^2 \rangle - 2 \langle [z(\mathbf{r}) - \langle z \rangle][z(\mathbf{0}) - \langle z \rangle] \rangle \\ &\sim 2w^2 (|\mathbf{r}| \rightarrow \infty) \end{aligned} \quad (16)$$

となる。3番目の式の最終項は、 $\mathbf{r}$  が充分大きくなって  $z(\mathbf{r})$  と  $z(\mathbf{0})$  に相関がなくなれば 0 になる。

一方  $\mathbf{r} \rightarrow 0$  となるに従い  $H(\mathbf{r}) = \langle [z(\mathbf{r}) - z(\mathbf{0})]^2 \rangle \rightarrow 0$  となるはずだから、 $H(\mathbf{r})$  の一般的な振る舞いは

$$H(\mathbf{r}) \sim \begin{cases} r^{2\alpha} & (r \ll \xi) \\ 2w^2 & (r \gg \xi) \end{cases} \quad (17)$$

と仮定する。この時  $\xi$  は横相関長 (lateral correlation length) と呼ばれる。

もしこのような  $H(\mathbf{r})$  を

$$H(\mathbf{r}) = 2w^2 f\left(\frac{r}{\xi}\right) \quad (18)$$

と書くと、関数  $f(X)$  は  $X \ll 1$  で  $f(X) = X^{2\alpha}$ 、 $X \gg 1$  で  $f(X) = 1$  となる。このような関数としては、例えば

$$f(X) = 1 - e^{-X^{2\alpha}} \quad (19)$$

などがある。このとき  $r \ll \xi$  における  $H(\mathbf{r})$  の漸近的な関数形は

$$H(\mathbf{r}) = 2 \left( \frac{r}{\eta} \right)^{2\alpha} \quad (20)$$

と書けることになる。ここで  $\eta = \xi w^{-\frac{1}{\alpha}}$  は散乱において重要な量になることが後に示される。

### 2.2 自己アフィン表面の散乱因子

散乱因子と位相相関関数の関係を再掲する。

$$S(\mathbf{k}) = \int d^2r C(k_{\perp}, \mathbf{r}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}}$$

また、相対変位  $z(\mathbf{r}) - z(\mathbf{0})$  が Gauss 分布をしている表面での位相相関関数  $C(k_{\perp}, \mathbf{r})$  は

$$C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = e^{-\frac{1}{2}(k_{\perp})^2 H(\mathbf{r})}$$

であった。

自己アフィンフラクタル表面においては  $r \rightarrow \infty$  において  $H(\mathbf{r}) \rightarrow 2w^2: \text{const}$  であるから、この時の位相相関関数  $C(k_{\perp}, \mathbf{r} \rightarrow \infty) \equiv C_{\infty}(k_{\perp})$  は、 $r$  によらない  $k_{\perp}$  だけの関数と考えることができる。この  $C_{\infty}(k_{\perp})$  を用いて位相相関関数を

$$C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = C_{\infty}(k_{\perp}) + \Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r}) \quad (21)$$

のように分けて書くことにする。 $\Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r})$  は言うまでもなく

$$\Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = C(k_{\perp}, \mathbf{r}) - C_{\infty}(k_{\perp}) \quad (22)$$

で与えられる関数である。

この関係を用いると散乱因子は

$$S(\mathbf{k}) = \int d^2r C_{\infty}(k_{\perp}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} + \int d^2r \Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} \quad (23)$$

となる。第一項では  $C_{\infty}$  が積分の前に出て、残りは delta 関数となる (ホワイトノイズの Fourier 変換)。

$$\int d^2r C_{\infty}(k_{\perp}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} = (2\pi)^2 C_{\infty} k_{\perp} \delta(\mathbf{k}_{\parallel}) = (2\pi)^2 e^{-(k_{\perp} w)^2} \delta(\mathbf{k}_{\parallel})$$

実際には測定系の窓関数 (通常 Gauss 関数) が convolution された形で見えるので、この  $\delta$  成分は Gauss 関数として観測される。

また  $\delta$  成分は  $k_{\perp} w$  の増加と共に急激に減少する関数であることに注意する。形式的には X 線回折でいうところの Debye-Waller 因子と同じになる。熱振動の振幅の自乗平均が自乗平均ラフネスに対応する。

一方第二項を  $S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, k_{\perp})$  と定義する。すなわち

$$S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, k_{\perp}) = \int d^2r \Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}}$$

である。これがバックグラウンドの拡散散乱成分 (Diffuse 成分) を与える。

以上まとめると自己アフィンフラクタル表面における散乱因子は

$$S(\mathbf{r}) = (2\pi)^2 e^{-(k_{\perp} w)^2} \delta(\mathbf{k}_{\parallel}) + S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, k_{\perp}) \quad (24)$$

と書けることになる。

### 2.3 Diffuse 成分の形

位相相関関数のうち自己アフィンな変化をする成分  $\Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r})$  の形をもう一度書くと、

$$\Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = e^{-\frac{1}{2}\Omega H(\mathbf{r})/w^2} - e^{-\Omega} \quad (25)$$

となっている。ただし  $\Omega \equiv (k_{\perp} w)^2$  と置いた。

式 18 で定義されたスケーリング関数を用いると、

$$\frac{H(\mathbf{r})}{2w^2} = f(r/\xi) \quad (26)$$

であるから、結局散乱成分は

$$\begin{aligned} S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, kv) &= \int d^2r \left[ e^{-\Omega f(r/\xi)} - e^{-\Omega} \right] e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} \\ &= e^{-\Omega} \int d^2r \left\{ e^{\Omega[1-f(r/\xi)]} - 1 \right\} e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} \end{aligned} \quad (27)$$

と書ける。ここで中括弧の中身  $P(r) = P(r) \equiv e^{\Omega[1-f(r/\xi)]} - 1$  が  $r$  の方向によらず、絶対値のみの関数であるとする（すなわち方位角に対してラフネスが等方的）。すると式 27 の積分は

$$\begin{aligned} \int d^2r P(r) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} &= \int_0^{\infty} P(r) r dr \int_0^{2\pi} d\theta e^{ik_{\parallel} r \cos \theta} \\ &= 2\pi \int_0^{\infty} r dr P(r) J_0(k_{\parallel} r) \\ &= 2\pi \int_0^{\infty} \left\{ e^{\Omega[1-f(r/\xi)]} - 1 \right\} J_0(k_{\parallel} r) \end{aligned} \quad (28)$$

$$(29)$$

となる。ここで  $J_0$  は 0 次の Bessel 関数である。定義は次の式。

$$J_0(k_{\parallel} r) = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} d\theta e^{ik_{\parallel} r \cos \theta}$$

ここで  $P(r)$  をテイラー展開する。

$$P(r) = e^{\Omega[1-f(r/\xi)]} - 1 = \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m!} \left\{ \Omega \left[ 1 - f\left(\frac{r}{\xi}\right) \right] \right\}^m \quad (30)$$

これを式 27 および式 28 に代入してまとめると、

$$\begin{aligned} S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, k_{\perp}) &= 2\pi e^{-\Omega} \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m!} \Omega^m \int_0^{\infty} r dr \left[ 1 - f\left(\frac{r}{\xi}\right) \right]^m J_0(k_{\parallel} r) \\ &= 2\pi \xi^2 e^{-\Omega} \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m!} \Omega^m \int_0^{\infty} X dX [1 - f(X)]^m J_0(k_{\parallel} \xi X) \\ &= 2\pi \xi^2 e^{-\Omega} \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m!} \Omega^m F(m, k_{\parallel} \xi) \end{aligned} \quad (31)$$

となる。2 番目の式では  $r = \xi X$  として積分変数を無次元の変数  $X$  にした。3 番目の式に現れる  $F(m, k_{\parallel} \xi)$  は

$$F(m, Y) = \int_0^{\infty} X dX [1 - f(X)]^m J_0(YX)$$

と定義される関数である。

さらにここで  $f(X)$  の具体的な形として、式 19 のようなスケール関数  $f(X) = 1 - e^{-X^{2\alpha}}$  を利用することにする。代入して  $X' = m^{\frac{1}{2\alpha}}$  および  $Y' = m^{-\frac{1}{2\alpha}} Y$  となるような変数  $X'$ 、 $Y'$  を用いることによって、

$$S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, k_{\perp}) = 2\pi \xi^2 e^{-\Omega} \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m!} \frac{1}{m^{1/\alpha}} \Omega^m F_{\alpha}(k_{\parallel} \xi m^{-\frac{1}{2\alpha}}) \quad (32)$$

を得る。つまり  $F(m, Y) = \frac{1}{m^{1/\alpha}} F_{\alpha}(Y m^{-\frac{1}{2\alpha}})$  と置き換わったわけである。この  $F_{\alpha}$  の形は

$$F_{\alpha}(Y') = \int_0^{\infty} X' dX' e^{-X'^{2\alpha}} J_0(X'Y')$$

となる。

この関数  $F_\alpha(Y')$  は  $Y' = 0$  で最大となる偶関数になる。ここで  $F_\alpha(Y'_g) = 0.5F_\alpha(0)$  となるような  $Y'_g$  を定義すると、 $F_\alpha(k_\parallel \xi m^{-\frac{1}{2\alpha}})$  を  $k_\parallel$  の関数と見たときの半値幅は

$$\text{FWHM} = 2Y'_g \xi^{-1} m^{\frac{1}{2\alpha}}$$

となる。したがって式 32 は、半値幅が  $\xi^{-1} m^{\frac{1}{2\alpha}}$  に比例して変わるような  $m$  次の項の重ねあわせによって表現されていることになる。ここで係数項の  $\frac{\Omega^m}{m! m^{1/\alpha}}$  は  $m > \Omega$  で急激に減少するから、重要なのは  $m \sim \Omega$  までの項ということになる。

ところで  $\alpha = 0.5$  のときは

$$F_{1/2}(Y') \propto \frac{1}{[1 + Y'^2]^{3/2}}$$

となる。これは 2 次元の Lorentz 関数と呼ばれる。

## 2.4 Diffuse 成分の漸近形

### 2.4.1 $\Omega \ll 1$ のとき

この場合重要なのは  $m = 1$  の項のみとなる。

$$S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp) \sim 2\pi\Omega\xi^2 e^{-\Omega} F_\alpha(k_\parallel \xi) \quad (33)$$

したがってこのとき Diffuse 成分の半値幅は  $\text{FWHM} = 2Y'_g/\xi$  となる。ただし  $\Omega \ll 1$  は  $\delta$  成分がかなり大きいので、測定は難しいかもしれない。

なお  $Y'_g$  は  $\alpha$  に依存する量であることに注意する。

### 2.4.2 $\Omega \gg 1$ のとき

この条件は逆に  $\delta$  成分が非常に小さい場合である。詳しい式の導出は省略するが、式 32 の Bessel 関数の項を一度 Taylor 展開してまた戻す、という作業をすると、

$$S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp) \sim \left(\eta k_\perp^{-\frac{1}{\alpha}}\right)^2 F_\alpha\left(k_\parallel \eta k_\perp^{-\frac{1}{\alpha}}\right) \quad (34)$$

となる。 $\eta$  は 2.1 節の最後に出てきた量で、定義は  $\eta = \xi w^{-\frac{1}{\alpha}}$  であった。

したがってこの場合の半値幅は  $\text{FWHM} = 2Y'_g \eta^{-1} (k_\perp)^{1/\alpha}$  となる。

## 3 自己アフィンパラメータの決定法

まず重要なことは、ミクロなスケールでの表面の特性は Diffuse 成分  $S_{\text{diff}}$  に表れる、ということである。 $\alpha$  と  $\xi$  が該当する。

### 3.1 $w$ : マクロスケールでの RMS ラフネス

1.  $\delta$  成分の強度  $I_\delta$  は  $e^{-(k_\perp w)^2}$  に比例するので、 $\ln(I_\delta)$  と  $(k_\perp)^2$  の傾きが  $-w^2$  となる。

2. 構造因子の  $\delta$  成分  $S_\delta(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp) = (2\pi)^2 e^{-\Omega} \delta(\mathbf{k}_\parallel)$  であるから、

$$\int d^2 k_\parallel S_\delta(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp) = (2\pi)^2 e^{-\Omega}$$

である。一方構造因子全体の積分は

$$\begin{aligned} \int d^2 k_\parallel S(\mathbf{k}) &= \int d^2 k_\parallel \int d^2 r C(k_\perp, \mathbf{r}) e^{i\mathbf{k}_\parallel \cdot \mathbf{r}} \\ &= \int d^2 r C(k_\perp, \mathbf{r}) \int d^2 k_\parallel e^{i\mathbf{k}_\parallel \cdot \mathbf{r}} \\ &= \int d^2 r C(k_\perp, \mathbf{r}) (2\pi)^2 \delta(\mathbf{r}) \\ &= (2\pi)^2 \end{aligned}$$

である。 $H(0) = 0$  なので  $C(k_\perp, \mathbf{0}) = 1$  であることを利用している。

したがって両者の比  $R_\delta$  は

$$R_\delta \equiv \frac{\int d^2 k_\parallel S_\delta(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp)}{\int d^2 k_\parallel S(\mathbf{k})} = e^{-\Omega}$$

となり、2 と同じ方法で  $w^2$  が求まる。

3.  $\delta$  成分の代わりに Diffuse 成分の比  $R_D$  を用いれば、

$$R_D \equiv \frac{\int d^2 k_\parallel S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp)}{\int d^2 k_\parallel S(\mathbf{k})} = 1 - e^{-\Omega}$$

から求められる。もし  $\Omega \ll 1$  なら  $R_D \sim \Omega$  となる。

### 3.2 $\xi$ : 横相関長

2.4.1 節で述べたように、 $\Omega \ll 1$  のとき、Diffuse 成分の半値幅が  $\text{FWHM} = 2Y'_g/\xi$  となることを利用する。

### 3.3 $\alpha$ : ラフネス指数

逆に  $\Omega \gg 1$  のときは、2.4.2 節で述べたように、Diffuse 成分の半値幅が  $\text{FWHM} \propto (k_\perp)^{1/\alpha}$  となることを利用する。

また式 34 より  $S_{\text{diff}}(\mathbf{0}, k_\perp) \propto (k_\perp)^{-2/\alpha}$  であることを利用しても求めることができる。

## 参考文献

- [1] H. -N. Yang, G. -C. Wang and T. -M. Lu; *Diffraction from rough surfaces and Dynamic Growth Fronts*, World Scientific (Singapore), 1993 (ISBN: 981-02-1536-3)